高田敏子『月曜日の詩集』より「海」

少年が沖にむかって呼んだ
「おーい」
まわりの子どもたちも
つぎつぎに呼んだ
「おーい」「おーい」
そして
おとなも　「おーい」と呼んだ

子どもたちは　それだけで
とてもたのしそうだった
けれど　おとなは
いつまでもじっと待っていた
海が
何かをこたえてくれるかのように

谷川俊太郎　詩集『旅』より「鳥羽１」

何ひとつ書く事はない
私の肉体は陽にさらされている
私の妻は美しい
私の子供たちは健康だ

本当の事を云おうか
詩人のふりはしているが
私は詩人ではない

私は造られそしてここに放置されている
岩の間にほら太陽があんなに落ちて
海はかえって昏い

この白昼の静寂のほかに
君に告げたい事はない
たとえ君がその国で血を流していようと
ああこの不変の眩しさ！